

大阪府を中心に複数の医療・介護・教育施設を展開する錦秀会グループ。「やさしく“生命”をまもる」という基本理念に則り、スタッフの医療安全教育が行われている。今回、療養病棟を中心とする阪和第二泉北病院、急性期病棟を中心とする阪和記念病院、錦秀会准看護学院で、T-PAS(予測・予防型の安全対策)研修を実施した。その様子をレポートする。



“失敗体験による学び”で 事故を予測・予防する力を養う

日常使いなれたシリンジや輸液セットなどの汎用医療機器にも、医療事故の危険性が潜んでいる。それらの添付文書には、使用時の注意事項が記載されており、メーカーから注意喚起を行っている。

しかし、実際は添付文書を現場で確認する機会は少ないのではないだろうか。テルモ株式会社では、こうした状況に対応するために、体験型の研修をとおして汎用医療機器などの情報提供を行っている。T-PAS研修は添付文

書に記載された注意事項のうち、発生頻度や危険度の高いものを参加者が模擬的に体験して理解するという研修である。

「医薬品の添付文書でさえ、薬局に問い合わせ初めてもらえるものだから、医療機器の添付文書なんてふだん読むことはないの、私たち教育担当も気がつかない専門知識を提供いただき、ありがたいと思います」と話すのは阪和第二泉北病院副看護部長の吉田寿子さん。実際に受けてみると、実

験感覚で楽しいばかりでなく、実感として知識の定着を促すという教育効果が期待できるという。

汎用医療機器の扱いは 手の感覚で理解することが大切

あらゆる診療科で幅広い医療者が使用する汎用医療機器だが、改めて身をもって正しい使用方法を聞くととはっとさせられることがある。研修に参加した阪和第二泉北病院の徳永祐美さんもその一人だ。

「以前、三方活栓がしっかり接続されていなかったため、薬液が漏れて患者さんのシーツが濡れてしまったことがありました。それ以降、ねじこむように入れていたのですが、ねじこみすぎず、ゆるすぎず、一定の位置までで止めることが必要のだと体験してみてもわかりました」

昨年、療養型病棟に入職した徳永さんは、三方活栓を回して接続することは聞いていても、力を入れて回しすぎると破損するとは知らなかった。実際に手を動かすことで、力の加減が感覚的に理解できてよかったと話す。



液漏れがないように、ぎゅうぎゅう力を入れて回しがちな三方活栓。結果、破損してしまうことも



三方活栓のコックとシリンジの目盛を同じ向きにするためには、ちょっとしたコツが必要。体験すれば習得できる



「実際に体験したほうが頭に入ります」と阪和第二泉北病院療養型病棟の徳永祐美さん



「体験型の研修も楽しいし、メーカーの人が院内では聞けない専門的な話を面白く話してくださってわかりやすかったです」と療養型病棟の高嶋渚さん



療養病棟が中心となる阪和第二泉北病院では、高齢患者の転倒・転落を防ぐための危険予知力が求められる。「T-PAS研修のテーマは同院の看護師育成のテーマに合っていました」と時本容子看護部長

一方、入職2年目になる療養型病棟勤務の高嶋渚さんは、「講義型の研修が多いので、体験形式は珍しくて新鮮でした。材質のことまでわかりやすく、楽しく説明してくれてよかったです」と話す。

日常の作業が、頑丈なシリンジに亀裂を生じさせる可能性もあることを模擬体験して、高嶋さんは驚き、危機感を覚えたという。

「ふだんから何気なく行っていることでしたので、現場に戻ってみんなに伝えなければと思いました」

失敗体験が 学びを深める

経験年数1～2年目から10年以上のベテランまで、幅広いスタッフが参加した今回の研修は、参加者の技術向上はもちろん、現場への伝達を通した教育効果もねらっている。

阪和第二泉北病院看護部長の時本容子さんは、楽しみながら感覚として理解することで、知識を効率的に身につけることができると評価する。

「KYTなど、看護部の医療安全研修を含めて、いろいろな研修を年間6～8回行ってきましたが、参加型に効果があると感じています。しかし、T-PAS研修のように、どうしたら破損するのか、限界を知るために実際に壊してみるというタイプの研修は初めてです。この体験はとてよよいと思いました。失敗することで、知識は自分のものになるからです。しかし、病院としては、なかなか医療機器を“壊していい”とは言えません。院内では企画しづらいタイプの研修なので、よい

さまざまな人と連携し 成長をめざします



錦秀会グループCEO
数本雅巳さん

「やさしく“生命”をまもる」を理念として、病院、介護施設、看護学校、健診センターなどにより、地域に住むみなさんの健康な生活を守ることを使命としてまいりました。よりよい医療、介護の提供ができるように、職員教育の拡充も大切

だと考えています。

そのために錦秀会グループは、ほかの医療機関やメーカーの方々、患者さま、利用者さまと連携し、さらなる革新と成長をめざしていかなければならないと思っています。

予測・予知能力の 一層の向上をめざして



錦秀会グループ看護局長
福田悦子さん

“安心して信頼できる心のこもった看護を提供します”という理念のもと、“人として成長し、専門職としての役割と責任のある業務が遂行でき、安全・安楽な看護の提供ができる人材の育成”をめざしています。錦秀会グループは、約7,000床のさまざまな役割を担った施設があります。各施設で体験型グループ研修とし

て、新人を対象としたローテーション研修や、中堅看護師研修コースの看護・介護技術研修も企画しています。

安全対策研修も取り組んでいますが、今回、テルモ社のT-PAS研修をとおして、医療機器の仕組みや安全な取り扱いを理解し、予測・予知能力の一層の向上をはかりたいと思っています。



阪和記念病院
看護部副部長の
十河史恵さん

経験になりました」

新人指導のために 基本的な汎用医療機器の 理解を深める

「ふだん使いなれた医療機器の扱い方を、再認識するきっかけになりました。参加者も理解しやすかったと思います」と話すのは、阪和記念病院看護部副部長の十河史恵さん。

現場で新人指導を担当するスタッフを研修対象としており、実際の指導に反映されることを期待する。しかし、もともと汎用医療機器の扱いは、教わるものでなく先輩の手技を見よう見まねで覚えるのが日常。改めて、多様な手技があることに驚いたと話す。

「実際、マニュアルの手順を省いて行うこともあるので、それが機器の破損につながるインシデントになると気づかされました」

同じ医療機器でも人工呼吸器や透析装置などへの医療事故の意識は高いが、毎日扱う身近な汎用医療機器に対する意識は比較的低い。しかし、新人を指導するにあたり、「ふだん何気なく使っている基本的な機器を理解することから始めたい」と感じたことが、研修導入のきっかけだったと看護部長の



診療科によっては写真のような手技を行う場合があり、思わぬ事故につながりかねない



シリンジを分解して構造を確認中



阪和記念病院
看護部長の
黒嶋千恵さん

黒嶋千恵さんは話す。

参加者も、「いつも使い慣れているという慢心があった」「ふだんの業務で意識しない部分」と、盲点に気づかされたようだ。また、看護師経験1～20年目以上と幅広い世代のスタッフに加え、教育担当やリスクマネージャーなどが参加したが、「力の加減は適当にしていたが、今回の研修でわかった」「すぐに現場で活かせる内容」「実際に実物を使い体験することで実感がわいた」と満足度は高く、それぞれに学ぶものがあったようだ。

同院の医療安全研修は、病院全体で行う年2回の研修のほか、入職時研修、年次別・コース別教育プログラムのなかで実施されている。

「“医療安全”という名目の研修でなくても、技術研修のなかにその要素があることを常に意識して指導しています。たとえば、注射の手技のなかにも管理面、安全面、感染面の注意事項があり、それぞれの要素をトータルで理解し意識することが手技を行ううえで大切だと思うからです」

演習形式を取り入れ、臨床で迷ったときに手技を確認できる研修室を確保し、環境整備に取り組んでいるそうだ。



阪和第二泉北病院、阪和記念病院が

看護学生も T-PAS研修を体験しました



研修に参加した三野由美子さん、青木正恵さん、浦紀子さん

これから臨床現場に立つという、卒業前の学生がT-PAS研修を体験した。参加したのは、錦秀会准看護学院の学生56人と教務職員5人のみなさん。実際の汎用医療機器に触れる研修は新鮮に映ったようだ。

「汎用医療機器の取り扱いについての研修は初めて。シリンジがあんなことで割れるとは衝撃的でした」と話すのは三野由美子さん。青木正恵さんは、「実習では横で見ているだけなので、どんなに一生懸命見ている、実際手を動かして覚えるのと違います」と、入職前の経験の必要性を訴えた。

「教科書で学んだことをいきなり実践とい



うのは無理があるので、患者さんのケアに入る前にできるだけ、このような実際の機器に触れて体験できる機会がもてたら」と浦紀子さん。学生には、プレ体験として楽しみながら役立つ貴重な授業だったようだ。

同学院副学院長で教務部長の井上敏子さんは、「かぎられた時間や資源のなかで、学生に提供できるものにもかぎりがあります。T-PAS研修は、それらをクリアして卒業前の学生たちのモチベーションを高めるとてもよい機会」と言い、エビデンスを効果的に提示し、参加者を惹きつける見せ方や進行方法も指導者として学ぶべきところがあったと続ける。

「失敗して初めて自分の限界に気づきます。そこで、未熟さを受け止めて考え続けること、患者さんに不利益にならないように勇気をもって踏み出すことが大事だと言いつけていますが、いまは失敗することが許されない時代。今日は、失敗経験から学べる貴重な機会になったと思います」



「汎用医療機器の特性を知ったうえで、実践に入ってもらったよい機会になりました」と副学院長で教務部長の井上敏子さん

所属する錦秀会グループでは、ユニークな研修を行っている。

「ローテーション研修」といい、入職後3年間、グループ内のさまざまな医療施設が体験できるというものだ。急性期病棟や療養型病棟、精神科病棟やホスピスなどの特殊性をもった施設をまわることで、入職者が自らの適性を見つける機会を提供している。退職せ

ずとも、異動というかたちで希望する部門で働くことができるという。

錦秀会グループは、こうしたさまざまな研修によって、医療の質向上と安全の確保に努めている。「やさしく“生命”をまもる」という理念に沿った実践のひとつといえるだろう。

錦秀会グループ

- 医療法人錦秀会
- 医療法人財団兵庫錦秀会
- 医療法人聖和錦秀会
- 医療法人睦会
- 社会福祉法人難波福祉会
- 社会福祉法人帝塚山福祉会
- 株式会社Nishiki Corporation
- 財団法人阪本精神病理学研究所
- 財団法人大阪難病研究財団

錦秀会インフォメーションセンター

☎ 0120-787-500